風俗文選　二

911.3
フ
2

勝

風俗文選巻之二

五老井許六選

○賦類

南都賦

汶邨

一あをによしならの都はさて三笠山の麓なる元明天皇和銅二年藤原の京よりこゝに移さるゝ大宮所にて佛者佛神をあがめ給ひて。五濁を離るゝ名所多し。月日の光霞鷲尾上の文。鏡の神も猶の廣継ときけば浮雲おほひて唐招提の僧とて。氷室。率川。東大寺の八幡。二月堂よ若草井あり。三月堂。手向山。猿沢の池の八所の御旅所をさゞめ。大門の折節の源の桜花を張。興福寺を

南都賦　汶邨　鎌倉賦　許六
吉野賦　文艸　松嶋賦　芭蕉
冨士賦　嵐蘭　湖水賦　李由
前麿山賦　支考　後麿山賦　去来

七堂伽藍ぞろひし。山階寺とも中比は馬屋寺とも申を
金堂。中金堂。食堂。講堂。南円堂は。阿弥陀堂の像を
うつして順礼の札を納め。東円堂は。いにしへ乃八角堂
をおもしろく花垣の庭を領じ。西金堂は楽をかなでゝ
南大門よりうつして。薪乃能をそなへ。七度半の使はなく
乃猿楽をあそぶ。西大寺の経を読て法会にハ薪の禰
宜。観世。保生が静乃まゐ名人の芸をきそふ。大倉の芭蕉
よ。達人の名をあらはす。喜多は其の能。若宮の能。春日祭礼
祭。素袍絹に大衆の執をはくみ。大華表は。錦を
着て衆の下より矢を立合を舞。猿楽乃児に狂言
衆とりけ。赤衣乃仕丁を棒と思ひ。大路を通。
持小太刀持。競馬。流鏑馬も谷川を越。甲冑武者し。府の
乃児も綾藺笠よりも矢を持。関白代の束帯して南の宮を
かざし。バチヨ被児を縦つきて。揚は木履をはき侍。ハイケミ
乃神子は。奈良乃神子。細男。西室付の楽人。ト力の相手を仕
下乃窟老。猿楽の御幣。田楽乃ビンブロ。其も二月の雷が
ちりしぞめて霜月の影をさし。夕向もしゝ春日の祭
をまつりし。武蔵野の葉末の若草をよむ。雪消の沢野の
池御手洗へ。佐保川一位。二位。三位の橋。馬出。東大寺乃橋
乃瀧。春日竜の瀧。森を神垣。千本の柱。地獄谷。千手谷。
瑠。逢坂の瑠。ひとり南みかしり山よ。鶯の井坂に晴をわびて雉の
羽音よりしもり草山よ眠をさまし。庭の春日野の郭公ハ様

住乃池に浮ふ。衣無柳。良辨杉。夜泣の地蔵。文使乃地蔵む
悪ちみれ達ちて。鬼乃手形。涙よなかされ十三鐘とて七ツ六ツの間
[illegible]はく。角寺。紀ちる。鼓着きよハ。大塔の名を隠し[illegible]
ぞ。義経の腰をとゞむ。[illegible]衛ハ。治承よ焼。杉本を[illegible]
も。俊乗[illegible]乃[illegible]をふむで。龍松院ハ。新をおこなふ。[illegible]
伊勢の[illegible]眺望をなし。柳[illegible]緑花紅乃碑ち。[illegible]乃
[illegible]とろや。華原磬。泗濱石[illegible]乃も[illegible]
屏風。柳生[illegible]乃剣術。宝蔵院乃十文字[illegible]
大[illegible]ある乃豊心丹。[illegible]味噌。力餅[illegible]酒。[illegible]
[illegible]。なら團扇。墨。晒。世よ名[illegible]るく。[illegible]
[illegible]。若井が奥足。文殊が[illegible]。[illegible]乃
[illegible]風炉。[illegible]炮烙。[illegible]。なら[illegible]ヤチウと名つき[illegible]茶を
硯水とりふ。[illegible]桐[illegible]。女合[illegible]。[illegible]乃石。[illegible]村の[illegible]。
[illegible]屋乃赤飯よた[illegible]瘦る人ち。金堂乃[illegible]
[illegible]過乃[illegible]。鳴川の別も[illegible]よ万金[illegible]ひ
よ一命を[illegible]むぞ。四て七口。[illegible]ハ八[illegible]。町し[illegible]御門の[illegible]
て[illegible]巻をとうけ。[illegible]乃なわるむ
誘[illegible]よすゞれ。[illegible]人よこ[illegible]わ。[illegible]都の。おわざ[illegible]遺
[illegible]なるべし。

鎌倉賊 [illegible]序

許六

支[illegible]桐[illegible]。[illegible]の[illegible]て。大職冠[illegible]子乃[illegible]

夢よしけく。源を汲むの絶せざる乃由くに郡乃名と成。鎌
倉乃時代。数代追捕使として。文武の行ずしむ。尊武乃
神亀年中までこそまきらかなれ。上総介平直方
に傍して。八幡太郎義家朝臣に至る。源家代々居館
乃地なると。賦して云。

○三代乃将軍。九代の執権を経。其の後さけバ。始の如く本望
抑おこやこの所そし乃里。鶴が岡。雪の下の景。下おこ若宮八幡
頼義朝臣の建立として。上乃若宮。源二位の頼朝卿
宮柱ふとしき立て。民のこゝろ捧ぐ。江の嶋に弁財
天。三浦。三崎の杜戸の明神あり。鳥居が原。八幡入
開だ乃花。由井の浜ある。下河辺。庄司が。並に樹所
小袋坂。稲村が崎。七里が浜。扇が谷より。鹿を見て。扇が谷より
佐竹乃役の館あり。腰越乃寺よハ。弁慶が申状の下書を拾
し。児が淵ありしハ。白菊おこれ朝みておとむ。乃瀬川よる
家なる親王おこ縁をうけし。滑川よハ。青砥が銭を拽る。日
蓮盛久が首の座。泉涼吟ておこ龍の口あと。大渓乃浦。
佞臣の滝よりしみ。実名のるハ。晩が為に弑せられ。勝
長寿院よりハ。義朝乃髑髏を葬る。法華堂よりハ頼朝の墓
塚を築く。西乃正人ある。三夜よ軍兵を説。定家のてる。七
まかり寺を詠む。化粧坂がある名をる。神奈乃鉢蔵
ある。静が舞とるやあお。和田。畠山。千葉。小除。葛西屋敷。梶原屋
浦。佐ゝ木屋敷より。馬ひやし場の水あり。平家が細路よハ。み

をきさまらふ泉をつくる。花か谷。蛇か谷。梅か谷。桂か谷。金蓮寺
乱橋あり。円覚寺。寿福寺。海蔵寺。石割玄翁乃宝基。
松か岡あり。尼寺也。籠釈迦。洪鐘ありて大仏
長谷の観音。金洗沢。星月夜の井。稲乃下小あふちあり
牛めぐらが威勢をそしる。小袋乃坂。寿経八椋山が法塔を
彼る。阿仏尼が日記。こゝて御像基乃紀行。花雪乃
下よ花を踏で嵐を。蔵る山の内よ錦で行く眺め。
寿泰納屋八の月が興か嶽乃室。磯のあしろ。感慨乃
情ともし。鳴乃声ある。懐旧の腸を断。雑々蘆ねが筆了
いやしめた府の業螺八。寛平が麻桐を起して。苔磨の海
光明寺まづ魚鼈の類。あるべきに

かーとぞかなハぬ日なし。名よしの地蔵。武桐の境として
六浦。金沢。むさしの地なれ。瀬戸乃明神よハ四然一覧の眼
をさまる。能見堂ハ京の都の秀景をうつせり。紅梅
乃松。金沢の文庫とうたふ。称名寺よありて今なし。文
覧像。菩賢像。猿多く梅。桜。紅葉ハ。もみぢ。紅
ふかひ。さの二梅をとじ。たちなる所ある乃
かり。又まだくも広らず。雨々海々のいで入
鎌倉ハの村木町といふ。大縁の宿ハ。楼女町の浦よ
されど東南よ海近く。西北よ山つゝきて。境地狭しくて
まそ谷々おのあり。されど都よりも繁華なる
なんぞ今乃春年よ遊ぶ乃

芳野山賦

丈艸

よし野をは吉野とのみ書て望郷の地なればなり。山ハ象山。
嶽ハ金峰。尾上。山の井。花園を詠ず。すべて二十一代の集に撰
三百七十余首。花ハ其人の集。西行頼政。蓮胤法師の家々にひ
花田も互にあらそひ。貞室老人のこれハ〳〵とばかりよ
みしこそまことなりけん。されバ吉野の吉野ハ。只何にか
ちぎみの桃李の前ならず。芳野川花の名する所ハ吉
雲和尚のたぐひなる所の名物なり。川々巴が淵よりも純
純なる吉野の山より高く。山ハ大峯より続きて。勝手の社をまつ
なれや。蔵王堂ハ。三もちろみに一つ前にて八郷と云。上市
より飯貝よりも下市をすぎて六田まで及ぶ。妹背
山を向ひて。弓取の城より。ちりぢりの桜はなさの花。桜田乃谷
さくらが嶽。関屋の花。滝ざくら。雲井桜。布引の桜。花矢
倉。花籠の水。嵐山。象山の行宮よりはるかに袖振
山。天武帝より五節の舞を始む。清見原の天皇ハ宝物
人の世をのがれし。後醍醐帝ハ吉水院を皇居にさだむ。義経
も此院にやどりし。秀吉も此寺にて陣をとりて賀名生て吉野
の御所。如意輪寺ハ亦御廟を築く。厨子の戸びらに南帝
の御歌をしるし。遥に岫の奥にハ楠正行が首
塚の前をとりしむ。判官の鎧。弁慶が太刀。口より山門に近い

痛腹(イタミバラ)乃ふもとに至ども空腹(ソラバラ)の坂なれバ揺よりおもむ
花よりハ静(シヅカ)が舞の装束(キサウゾク)を納め。子守(コモリ)乃若宮(?)の拝に上宝
家にてあまた頭　炎上乃後於此　永徳ゟ年中　桜本(サクラモト)乃坊。金精(コンジヤウ)乃明神。力乃
不動(フドウ)。四手(?)蔵王(ザワウ)。尊勝(ソンシヤウ)乃御(ミ)新帯(?)よりハ花住(?)吉林(?)さはなれ。
乃守護ち。桜本に崇山の先達(センダツ)也。大瀧ハ飛(?)河の瀧こる瀧。
蝉(セミ)が瀬。清明(セイメイ)が瀧。菜摘(ナツミ)川。やさしく乃清よわり家の栖
袖(?)子乃森。鷲(ワシ)の尾の続く龍門(?)が岳。しハ乃岩。亀石。大石。大杉(?)名人
義経(?)乃滝(?)。若葉(ワカバ)乃名井。鎧(ヨロイ)掛(カケ)乃松。かまえ乃やかた。猿(サル)引(ヒキ)坂
琴(コト)弾(ダン)。琵琶(ビハ)山。青根(アヲネ)が峯(ミネ)。釈迦(シヤカ)が嶽(タケ)七十五ありて八十乃岩屋(?)
出まき皆(ミナ)順逆(ジユンギヤク)二川乃通路(ツウロ)なるべし。岩屋(?)を頭巾(トキン)ほうの
貝(カイ)大(?)打。念珠(?)。錫(?)。杖(?)。鈴懸(?)。釣(ツル)蔓(?)。綿(?)頭(?)。掛(カキ)まわる(?)。
笈(?)細工。神材木(?)。山わおさ(?)。ハ若葉(?)より名をありき(?)。
しかるに桜ハ名を華(アダ)にわ。麓(フモト)より奥(オク)の院(ヰン)まで
右(?)乃山ハ。荊(ゼゴ)峰乃谷(ダニ)。平(?)石を攀(ヨヂ)上りて
をぞ伝(?)ひ。海石乃峯ぞ。みよ蓮(?)華(ラク)そ乃峰を揚(ゲ)
木の芽乃嵐(アラシ)。立ちゆるぬ雪をふらせる。麓(フモト)ハ
奥(?)ハむかし。解(カイ)落(ラク)山の深(ジ)深に。春(ハル)さ山の上(?)。
いづれか花の盛なきあらん。ぐるに。桜(サクラ)の名所(ミヤウシヨ)ハ
伊勢(?)桜。江戸ざくら。大桜。樺(カバ)桜。枝垂(?)桜ハ
乃ゑをきつい。寒(?)漬(ハマ)。咲(サク)とぞ。や熊野(クマノ)坂(?)
としの揚(ヤウ)貴(キ)妃(ヒ)と。世よりもなれば杜若(カキツバタ)ハ八橋(ヤツハシ)に名(?)
よく萩(ハギ)。宮城野(ミヤギノ)。号(ガウ)をさ。

ちらじさくらの名よ。若葉とさける花をちらず。ちらず、ちらず
とも探々こゝろ。理屈をつきぬるこゝろみる也。

松島賦

芭蕉翁

そもそもことふりにたれど。松島は扶桑第一の好風
にして。凡洞庭西湖を恥ず。東南より海を入て。江の
中三里。浙江の潮をたゝふ。七十二峯。数百の島々。
欹つものは天を指。ふすものは波に匍匐。あるは
二重にかさなり。三重にたゝみて。左にわかれ右につら
なる。負るあり。抱るあり。児孫愛すがごとし。内
外ばゞ。ぽつ(?)たる。宜島。しほがま島。雄島。地しま。内
裏浜。扁舟しま巡。雄島が崎にあそびて。乃山寺に滞りてまをく。
翁王の川をよばれてわかれしよみびとかな(?)
おもしろの松の盛をちるとながめて。松のひまより袖に薬
く。鶴なきわたり。枝をならし。ふる契の末も。絶ぬるはなく
乃ごとしと出つ。野田の玉川。沖の石。末の松の森。
武隈の松。松は境に名をなしてべきなり。志かまの浦よ。
塩竈明神あり。神主乃かす燈籠。文治三年
乃三郎寄進と記を。旅の雄島が磯を伝へてよりて。雲居
禅師の別室あり。坐禅石。瑞巌寺は。都揆
時より入りの建立。当時三十二世のむかし。真壁平四郎
出家して。入唐帰朝の後。開山す。ちよほ院宗森

鳧して。七堂伽藍となり待つなる原。流蓬壽ヶ海岸に
蹲老松影をひきらし。荒ハ餘波にひくもし雲の緒に手や
くふ桜葉汲風に吹くも亦ハ光るく。屛曲なとの川つらくちれ欠
ところでとし。其ハ気を宿縁として美人の顔を扨ふ、
ちるや振神のむりし。大山ずるの乃なきるもさらや遊
世の天工ハいづきも於人ら筆をとるに。詞を画さむ

富士賦

嵐蘭

不二ハ日本の蓬莱山也。むかし蓬霊が手ふ山とし
見て現なむ。徐福も此山に登りて仙薬を求めかくや姫
化しし化してしらしじ。三子

根八面別にまぶい侍道路ハ三はよりおらはつて筝
まきう緒をそ野ハ東西に長して百里にはうなる
裾ハ川をなる分かたくさる小斗に出し。林
陰に旭をかくやし。炭夫に雪をつてて山間に海を
きそへ。山をる来谷を攀。和田つ天翁類を遊うく
三峯名ハ山と称して。義楚六帖に恵は免それ日本
武尊ハ東夷をそきむて。草薙乃名をあるとぞ。
大名の於翁ゑ。ちゆし悔をあけめて。牧狩をれ給。
鳴俊の浅ゑ条の仇名をとらめ。人穴乃奥ハ仁田が
見をる別さけなわ十郎の交。五郎が社。西ハ大
文字なとゑ入へり。探幽ゑの筆もよおくらし。煙ハ古今

乃序に二流よりて揃へたる廻船に帆かけて一天
八寸の畧をとじむ。禅定の人は宝冠に額をつくる
下向なるも小袖の裾をふるふ。絶頂の軒に腰の
雀巣驚るは大志心して。停ち乃雲山におしかけ雪
乃羽をもは臆病になれる。外のすゝ(梵)は御しけ
苦。不盡再。富士岸岱。芙蓉峯。雪栗。八葉。松。橋の本
あそくひ。淮黒は竹の下越。根原あつく。銅を足柄関。
横げーて乃蘆。長ら井の淀に。佐夜の中山越。海を隔
青をかさぬ。こ清見寺乃九読。箱根。駿河者姿
貝なし。南岳乃橋上よは馬上に人の首をめぐらし。赤坂
渡る西の鷹。あらたか地乃忘に醉をさゝれ。光起しくる
熊ひをかさわぢらくる家より家も思へあられども。
諏訪の湖には倒乃影を濃し。甲州の府には三川
寄りこいへして。廟の絶をとひてなるべし。それは。詠
吾連俳の句数多くて紙をはしらば大かた山の言
さよは泣きむ。さ紙とも古今の風騒に一首あまりる者
も。赤人の句妙なるべし。それ余も此山に対しく
我が一しも及ばぬ。吾が義。富士吉野は句。下きなしとも。
東路に熟き人も。かくなるお悔し乃傍に心力を
費し。又あづま路におもむく人も。かくみに難き
富士をみんぼしして。一生を終るも共に孫多あ
すなるべし。

湖水賦

李由

○近江ハもと淡海なりしを。大和よりちかきによつて近江とはいふ。遠きを遠江と号すとかや。仁皇十二代景行乃御宇。滋賀の郡に遷都あつて。高穴穂の宮に行幸ある。三十九代天智帝。大津のミやにうつりて。廃帝乃御宇。保良乃都をうつさる。近州てしハ八十三郡。保蘆潤澤。種子倍を得。春氣早く到。田わた四萬。たよしの國とも称す。仁皇七代孝霊五年。地裂て湖となれり。同時富士山現ず。されバ不二禅定する近江人を先達とさだむ。よる日ミ精進して捨

て今ハなし。一郡ハ保より一村残れり。ちかごろまでありし。坂田の新郡に属す。同じく余吾。鍛冶の南湖ありと。大さつぱ二里あまり。されど日本ミづうみと称する。あまく琵琶湖の名也。形似たれバとて其名に依る。貴ムぐとハ。風土記にもありて。楽浪や丹穂てるちゝ文字。蒼葉よりはじまり。東西十里。南北二十余里。岩乃まもりがんたい。八百八川湖を囲む。山郷あまた家村甲よ。大小乃湖あり。竹生嶋ハ周廻一里。寺院九坊。天女をあがめて。岩ほそ乃神事あり。空海乃秘密を封じし。経政の撥を納めし。其峯嶋ハはくぶのまつりをしらせ。沖乃嶋ハ。沖津嶋山とよめれ。漁人まづる

すなわち白石と以かる。四石湖上よ時。樹すまし探はし
奥の嶋ハ。人家数百軒の義と斎らす。楮漆。漆
山。黒ばの八ッ鴻なし。鴫ハ求るれ巣はられ。勢田の
中鴻よハ。蛇橋しあわ゜入亀が出亀の二ッ鴻ハ繋ける
乃中よ浮め。山を比良四明の響をたかさし。膳所
吹乃彩をうつさ。梧を勢田。志郡乃橋。松ハ唐崎
手らし雲蓮ハ支那よ名らるく。萬葉ハ四川よ
肥ヘら柳太根。兵こゑ葺こハ幡数尾。高浜綃高宮
布。野州ざらし。高嶋硯。丈作墨。白川石。栗本材
木。庭石をまちくまする楽しく。嶋山の數珠ハ大間
乃白石（是方解石ナリ）[illegible]
種乃類おゝく。岩茸。日野椀ハ香津乃根中ちう
き燒ちゞる藥乃柔也。混元丹。百草。帷子。田楽。
醒ヶ井餅。多賀枚子。鍵村鴻。四十九張乃さきも
池の川 縫針。ちゝ山絲。国友鉄炮。長浜作判の小合羽。
是柴田勝家之製。甲中兵粮ノ助トス。端无のチハン。佐々木家ノ臣建部也。其子孫ノ菱農父ニテ手ヅカラ今着之。
大津するさ追弾村まと飛し。猿倉の生食も山中ゝや
よわせらるわ。湖中乃猟ロスゝ。尾上乃山よ締肯とは
そちふ石碑つきハ。阿野人を天下よ開也。白鬚の神
神ハ湖乃七度乃芳ノ原をのみすひ。磯崎は沙のお林
其田中村の御廟也。多賀ハ日吉乃神。山王ハ左つも也
人なくして更なわ。竹生の弁才嶋の数よ名こゝく。

新羅乃社ハ源氏なる大ぬしなり。勝を崇し所也大津の
乃こゑの神の社。今ハ濱乃八幡宮。豊浦の神ハ八幡宮と
ちつく宇賀野の神ハ此ハ。十四座乃延喜也在松山
のこし神ハ鐵津の彦根命とや奉る。金徳乃ま社
あんかバ金霊山を跡とし、皆すゞ平田山。鳴宮乃天
神とハ清川なる石也。流天神ちの天津彦根命なる宮
を住の神とて。千くの松原よこあふれしのふ名を
神代よりけずかゝるとて。大酒の徑行。勝蓋の所ある。
ちの根也しよ名ある也。山上乃観世音。堀川乃常。
寛治二年。白川の上皇。御幸乃地也。神と社佛
開金剛山乃堂ちゑよ此を唱 じたかにゆ

寺よ国並あるに。石山ハ観音堂の傍石ち白瑪瑙山あ
黄金なれ。皇州金山の始なり。三井ハ園城寺謹よ
名こるく。むしなうの山ともよ見て大山とゆへバ。
延暦あるよきいかわ。寺とゆへバ園城寺とさゝ法を和
出しぬる雲母の瑠璃也。堀中西教寺ハ天台の浄土おうす
寺。堅田乃浮御堂ハ。恵心僧都の千躰仏。本命すゑハ
顕れの我よ雨まで猿楽の不動ぞるハ。棹し飛の術よ名
まる也。矢見乃沈落。志賀の地落。石塔寺ハ天竺
阿育王の塔ときこえ。是所謂八万四千塔ノ一也。日本ニ来止ニツノ其一也。平流山と
行基四十九院をさそく。静寺乃内院を称す。三国伝記ニ云昔
袖霊山ノ下峯ヲ盗ミ湖水ノ瀬ニオロス其下ニ
慧デ石ト化ス今ノ荒神山ノ蛇石是ナリ。
毛る鍛冶。水源寺ハ叡空

派乃一本寺なり。此人おはる雪山になぞらへ。当流の道場ハ
一向宗の源にして。仲僧已下の道場帳にあるハ如是
畜生の形文字をかゝゆあり。亘満寺おゐて下業ハ小野
道風乃まい頃。池ちる乃ハ夫の綉ハ。金毘(カナフカ)の達逝。山寮寺ハ
作くらる道蓄が菩提所。コンクイ乃根元。白蓮こが本寺也。
敏満(ビンニン)寺般若(ハンニヤ)坊にハ。那須(ナスノ)与市が形として。むせ寺おゐて
種練貫(ユリスキ)乃れ。松尾寺おゐて本堂ハ飛騨乃匠が建て
あり年一の思雲れをかくす。尾屋(ウハラヤ)寺ハ太子の太王寺の尾を
ほりくせて。なく残りし地に埋て今もあり。東西本願
寺乃御坊。浄家一向の寺。浄済寺。龍潭寺禅
乃名寺は額にある名を含く。

とくじし。蟹(カニ)山寺ハ世に蟹乃寺と呼。若宮乃
也。安土山摠見寺(アヅチサンソウケンジ)ハ信長の建立。同本天守おゐて七重乃
菴(イヌカミ)を従(ズヰヤ)寛乃広間乃名額(メイガク)山寺に納る。観音寺ハ佐々木
乃城也すなはち観音寺城也。今ハ浜の蓮あり。太閤秀吉おゐて城
の材神(ソメ)坂本乃城ハ明智(アケチ)光秀が築しとそ神社を俵藤太
おゐて紀ハ蒲生(ガモウ)家にありて上ハ角京極ハ佐々木の主れ
なり。稲毛三郎(イナゲノ)ハ佐々木(ゲゴ)の後を紹て多賀(タガ)を治し。野
賤ヶ岳(ダケ)の七本鑓ハ。後代に名を挙(アゲ)しあり。本乃近江(タクミ)ハ
甲良(カハラ)乃庄よりおこて。名を坂本に伝へ。鍛冶(カヂ)の真字あ
るハ来よりいく名を湖舎に揚(アゲ)しあり。猿丸。黒主(クロヌシ)乃
歌をとりし尤。僧元政。季吟。菊翁。此など乃寿也。すべて

所々の所。一面に家ならび。猟漁集まるあまたすむ所。
近江ハ京ちかく。騒人墨客これを好ミ。彼近衛政家
の所とはし。先にも国中去るに漁付なくれる流なし。甚
戸に清濁をえりもて。うるおふ業をはふる事にも絶
しられず。又業に宜し。世に川魚といへる物ハ湖魚のす
なれ。汐なれし魚漁塩乃いとなきもとりえに太細巻細
四手。投網。竿丸。唐網。魞。簗。かりしに作鉢あさりなす
是乃あつ術もふりえべし。鯉。鮒ハ湖名にして鮒乃
品類。鮒のあぐいひとも名かずよいとあらしん。春ハ山
吹の子をいだき。秋ハ鱗に紅葉をちらしも。江鮒。鯇乃
名と実し。鮒。鯎乃味とえりん。これより他にある鮭と名
づけ。鯰ハ生味ある事をしるしや。勢田鰻。和尓鮒。氷
魚ハ近江にかぎらず（内膳式云。田上ニ取近江ニ宇治ニテ取ルヲ……リ十二月ニテ供之。氷魚ヲ捕ヒノ為ニ網代ト云）
不賀比。鮒ノフト。鮒ノカト。鱒ノ（ヒヲ合テ。其取トスル魚）
ず。鰉。鯉。小鰕。鮎。小鮎。鰷。鯽。水鮭子。山水鰍。
鮠。蟹。蜆。蜊。亀。石亀乃あらひ。獺ハ魚を
祭るとて川名所ハ網捷を好む。称て大津石と称をも
所乃湊津にし瀬田ハ大兄子小兄子か。やや川佐在る本
名取。こる瀬。伝馬ハ川にかかれり。段平に大石を積み。擁ハ耕
作乃為に作るもの也。唯肥付馬（不入船数）棚なし小舟。勢田舟。此ら乃ハ積
そ。舟人此上に風をおそれ。論ありとハ。汎乃さらふまりね
とハよ。ドイヲラハ。日和風ハ。ヤテとしハ名をさきにふ。勢田舟
作ハ何。ヤヤセ風。ナカセ風。サキ風などと云事の名に

しも杖ふるゝ日なし也。根まろくしハ湖上の風乃
音すゞしく。こゝに因てハ濁り海をながめん。非仏在人
八路三千縦横と吟じ。素堂乃鶉ゝ神をめぐらし。山崎乃
鴻よきこゝろを出ぐ万春も。膳老萬乃時あり。鴻あり。鴻
ゟ鶴、藤をむかしに帰て。石見をこゝ山とうつくしとや。玉の
清乃郁子を敷じてハ新葉乃法身を結ぶ。在世乃最
咲てや。藤堂家に花を捧ぐ。雲上の雲の木ハ神
代乃法ろうして。花洛の花をはや今も咲なれ。巍竹松
を。三井寺の衣毎に光をあらそ大数乃雨夜に、星影乃
大と義ようにを柿ほり八十余方名皆ことにあけし。えへ
きて。年々に貢を備ふ。大萬金の稲穂を奉るも。

此湖乃隈ひかるべし。

前磨山賦

磨山者丸山也。在肥長崎歌舞之地也。

支考

○七月十日ぐふる二方のうきよの功徳とやはよ女人の形
をまつる。西行乃日なるべし。此津乃遊女ども。人もん
人も見る袖むかしよりて日ハ花そるふゆざれ泊
よりし花めさせる袖て。花ずゝお乃むすびさ合るせ日
を。男もあふにまそて見し見ゆるんし。さるハ傾
城乃世ようの袖く。身をあふにまかと見る人ハ。浦の見
浮ぬんも。うみあふしなりん。今さし出るもさる丸山ハ
あまつ袖ども。たゞ大乃雲麗ぐしふ戯それて。都のさま不

おりんこうの手をおもふるまゝ花と云ふも我か何心なく
て茶湊冷たりしと云へる。雀乃花久彭しも手とも人へ伝ふ
ひぞいはゞ一つなるあひ人より訓さく。おと口ふもなからひ
こゝもこの我さんにゆりきて訓ほしちまける。
草むら乃露ことし 蝶のむれかと

須磨山賊

去来

卯月八日さらぬさへ我ちりいおわてゞちり花山寺に佛をおがむ
よそひ乃桂女彦乃月まいりでまるなれ。康平の丹もへ何
ぞ須磨ふれば浦人我まさんうちさ花て松風のわ
ふかれてハ。舊の窓れらくゞほに。源平乃昔の大ぞよ
吹あらし我てぞところに人をおい騒くあらんを我う手に
まぐれよ世をちまぬ。淡谷よ老乃下になくて。一たすし
に何事おもひもむ人もあるべしとあるぬんさんにれいる人
ら我てうれし。只深しそむる人をし乃そみが東都の寺
に捨らべしあそびむもの。雉彼乃浦のおしきまさる
とりやうくるまなどいいいくるべきさ寺のにほそにいて
ぬつきさ。こ靈花坊よりはなる光の賊つくるわきかと何のかゞ
三我て。終に仔の賊我わしよとおわ伝わる。
いかはらんやせむ乃傾落とかれまくる

賦類 附譜

鼠賦 去来

旅賦 許六

揚輝豆賦 毛紈

四睡盧賦 李由

閑居賦 汶村

招魂賦 支考

附 譜

百鳥譜

百卷譜

山水譜

風俗文選巻之三

五老井 許六選

賦類 附譜

鼠賦 并引

去来

此賦以五音相通假名字為韻

鼠ハ乃名をよめか君。又ねともよめともいへどもあ
あハれ四足の鼠ハ獣をつましても大なる所ハ只一寸ばかり
されハ寸ほどのもの。山椒の眼。小豆乃鼻。歯ハ糸をば
きりて小袖も縫べく。耳ハ赤子の貴のめぐりにも似たれ。
尾をこまかく錐のさやとなさバなし。ならび茨臓の
たぐひなりぞく。かくれ家も深く穿ぜむ。夜半て
屋根よりかしてへ事よめすことをまもて首をまきよふよる

ひべきなれ一行あるも。唯賊を飾りて思
（四）二月鼠の穴を塞ぐをばすし。訟おゐくつしくをおそへ
盗て人をおとろしハ。足乃ちらふ癖おろそうし（ヒ）神をの悴
すぐせ又酒をひとし兵れど。いりしう流酔をみしも。（フ）吐瀉を
害し。慈とそこなふぞ。殊更よいハど。（ヒ）天業をうむ事よも
御神ハ。病を生じ。（ヌ）ちりりしよ多をちらして男女乃中
ともさまくぞ。（ヲ）あやしき業をはらりて源平の乱を生く。（ワ）
祈い為つきひく。偽人の言めしまりいから紀ハりにもくのぞん
てのうち書を焚代乃寧禍となし。ね（ル）るぞ神佛乃ほころふをはん。
脈嚢よ誇しきられまり。（ル）多まれ抵をそ理月乃嵐を。儀
式てのうらみなどまそれ（リ）ぞくじ。ぬがあやしくれ。なるもへと給へ。
乃咲しさとや。方才献を身に浴えを傍觀をぬかて。漢
まとをやをかりても。（ス）きりしよ城をたのむひとも。舳を防く
手段ハあらし。（シ）高なる帝を乃みえてハ。萬のつくるむ慈
にもるべからぞ。（ス）術を守て。隆すれども。早業にてかなる
もおるいび拝よりさて。いりべりの乏ひをすらん。（ム）虚死任
て仕合よっ東波が袋と逃てやとも。生捕をてなまれる。張
満の丈いとうきなむ。（ム）武を身を顕よさげて。兒童の戯となれ
あるひは筆の間よ鬚とぬき給て。老の婚を鉄を（リ）くおや
まりて多に嵐とあれづうる。（ヒ）濡嵐と笑り給。文の嵐
こころしまて。人の為よぞ焼かれめぐ（ヘ）ゐさくれしよくて。模
嵐となりとて。疏理の令をまもらひてあきらしく罪ふれ（ヒ）。

はじしめがるさと思へバ目にみゆる細に響きて信用の中
叩くべき百敷乃かしこきも甲斐をむくいて鼻に繞る事ら
まふらし。師らむの玉きくへ耕べ手乃日の汁鍋をおかす楽
とゆつては、れづき乃長者の傳へなきかゝの眼をしる歟。もとは
鼹鼠。海原やこもり江の底になるゝなては海鼠とかや
猿頭の尾ながくすることは、まろふ鼬の四鼠の化したる也
烏羽玉乃闇き夜ハぶるぶちともなく侍り。象ともいふ
歎する川恐懼ぬる。麝香鼠ハ流しまよ佐な侍て
赤し悪よ钓そかづま害もあるやうなるハ。嫁入ある猫鼠
ふぞとくの乙ばゝを七郎と八中をし。新左衛門とつまるハ仍が
やなすりての陽なれべし。大ねずみ出来ら。将其用兵
何の...十二の子をうし。狼が尋よりとうはなく
坊むびこし口よ出く。猫の外にやをとせしつきしゃ墨よ
いつく乃たゞらぶや。栄稽也し鼠完よや。相羽の後乃鼠
が関だりるかに佐法の奥に鼠窟あるか目かなる身をすそ。
かりそめ乃世継ひざよふたゞり始しんぞすとおもはば
窮鼠かつて猫を噛の志あれとも。三井寺の頼豪が
大き乃ふきもひすゞかにもと遂るとハ様ささなく
ござりなき。

旅賦 并引

許六

旅ハ風雅の花。風雅ハ過客の魂。西行宗祇の

尺なし。ハ皆桃源乃情なれ。象潟白川の田植寄
と出羽。奥羽の月を見ざりし。ふる錦乃古事に於
すがたを慕ひし。あつミ山乃夕涼ミハ吹浦を始
め。作法に横ふ天乃川に。細雨乃袂とをくれ
を終よわ蛤乃二見を流つまて。七百二十余程を除
ど。名しられ旅髪乃力量に感じて。一種の鏡を掛
く。風流を重ねてほ。只こひ芭蕉庵を学ぶ。総の
執行に乃ぶ時。年に旅十余の術を叩きて。深じて
何し巣この求めに応ずど。ふく風雅よるまわ。俗語とお
つれん。犯財に遊ともあ。扨。ありし二奥乃細道を
松乃類あハ高らど。

「旅店のうさ。上段に書院。床掛物もなし。火の気は
た膝ややくるみけく。門口乃入湯桶。うち付て座られ。
庭に小松のさりるハ。枝への松さもやぶりし。出女の手を
鴨ハ法会をそらぞ。振子板敷ハ蔭みて。隅しまで畳で。
手す。天井襖も。あるまじふこさいづれ。襖紙あんどうくしく紙
をこりよん色乃心ともふやに嫌ひわ。旅貧。亭主難書に
せがまれ。やりしに枕をくるさずき。乃より夜具がされる。あるさ
しは蚊こに夏を破る。出生ハ七つとめひめて。欠出ゑ。
旅人も亭主もよく寝て。扨。あかけくわるかくばか
なるし
大名乃宿寝まても旅する人をさけ

みづきの上陸いそぐ。船路の胸ばらしとぞいふ。かゝる趣也
十とせはかり。馬さしとつりし合。一僕乃供まさりし代
枝かまり。熊乃あらねよつきの男を記し。挑灯と旨
して。飛脚をりをる様とし。入湯の一年よ入さ後
何乃ゆゑぞや。はえの枝葉よ何のはりしといふおふ
世話やされなよあきらぬ旅の宿としいふ句もぶ山
情ありかたんつし。
漁舟の宿あまよ。餅酒のなきもなし。磨計胡桃の
餅とくさまで。素手偏まれおそかりきめ紙兄らとぶ
うつ。寒気をも冷素麺をすゝむるは。さ夜乃草屋。饅頭
乃はかしとえしてるは。風俗の一寸世。卯子の煮ぬきを。
本草乃様なれ紙ハ何まそさみ。鮎の看板ハ鉋をかけ
さむ。胡蘿蔔乃図写ハ。何の様く絵あるぞ。
春うけ上春乃蜜柑や宮ばの山
舟川のゐる也る新の情あはし。かぞへがたし。又月の
大なるかなら続乃手稲よ出入。おのが生活ハ流るゝまで。
肩ざけ乃繻袢を納して。ちがうるも息をはくされは
鴻田倉谷の賊なれ。我乃浅深を何多行とあらし
さるハ。大きなる洒落也。天就の中は流ハ。ゐる人をさ
まよふ。家人も股ざけ入て荷を肩よかけて。あがれ
いれる。質素を夜して舟場よ立。国なが淀とかくす
きるハ。渡し場の情也。る士かる蓋舞ら。転そてよ四

月を送る。一盃乃酒に浩然の気をやしなひ、一曲を
を漂ひ飄々として。雲水の影を追ふ。交友の
旧も。老少乃ありさま。桜乃本ちる下に眠て。蝶の夢に
逍遥し。欲念を忘れしめつゝ。けふハ仙を尋る出の家
に帰りては。小便たれしてながら。吸がらハ其の裏にすて
る。読ハ耳の穴に納め。今ハ犢鼻褌に結ぶ。一とかして名
御も着て世にある人とてふく[illegible]を出家
者と定めざるハ。世をやすうとる人をも似たり。
出女も出かはり前や年一乃業
流浪漂泊のともがら。衣ハ秋まで寒く。春日なれ。猫
前足よハ宿とかし。菓子門下に二度とめ[illegible]

乃為に霊気の久しく清らかなるをあらじ。ハ出来すくそ布に
して、ぬ秋くる袖を旗大にかづる。ある八三堂を並べ
一夜袖に志ずと打て。志づくるを休ましむ。猿ぬれ端
おわ追おろさ秋て。命ておろねおりわ股をすくめ。あまた
乃まふ杖を携て。あゆむべしともなくして。人間夜あ
の新年ハ時もなくなりぬ。醫療乃名法をもちて
中時ふかくハやうし。急病を防ぐ。巡礼飛脚の旅ハ路
頭に倒れ臥。行司なる肝要に追ひとしらむ。老僧の塾
みそて門下に入。我らへかさなるわ。終に当家のかまへ
ほくかゝて何ぞかたとなりん。其を忘らぬ大名の
中まで久しく年の齢。衣類の模様を小紋にあらされて

何某此わかる人といふ名もなかりけり世に荒野乃
辻堂の茎に。簑笠をよみて因幡の別を情し隅田
川乃宗祇を尋て遊ふ。古墳よしはる今まで
古注の人。猿猴乃情を画して風雅の端をさぐる。
餓鬼ハ白川乃言をよみて二まいみちのくにおもむく
不二(アシ)石高乃二句を尋めて。ずかやぶに向て給る有。
魚堂老人あわ。東海道のつましもあらぬ人乃風雅
をおもひ川くだりしといふ。旅し翁の歌ノ耳の底ま
としのまゆ。

揚揮豆賦

毛紈

赤小豆(アヅキドノ)氏の族にハ。一ヶ俵(タハラ)に納て。二より山とあまりて是よりけらの乃
仇名とされ。神農乃粥(カユ)ハ癖(キズ)を払ふと也。卯月の売れ牡
丹餅らるりしより名聞と異口して。今様乃つきるハほると
とのこひなりし。我もむ人をもく秋の夕れよ此神なり
名をとねらゐて。此秋のおとしがき持てよれ。純浴乃人ハ湯あ
をとしらいし世々ハなら。饅頭乃唐韻めくけるぞ。アこよ
ハ稀ぞ其乃つよに乃識(サワ)乃こびけるぞ。糸綴ともいふ世
深窓とハ但居人乃名づけさゝる名にして。あふつ無と
解(トク)謎(ナゾ)けるべし。益(ブ)葦(ロウ)苣(テイ)にも居乃義(リ)を画しし。せ

[illegible]

甲梅序賦

僧李由

○鬆を撚まくとつけたる窩ゐ行みし。氷の石お用んとそ
岩窟乃下にまおつまくる世上あくるよ。扇よ珠鹿をお扱
し。下則よ志くもとつきてぞ乃竈の縫ひくこ社也
あゆく待。迷陀乃螢の舟よ来しとあそぶ。されバ梅乃下よ
また尭そらひ。鶯乃巣のやさし乃。鳥の巣乃ぬけくら
なり。汝お乃絶し、クせ得たるものおもし。此梅ぞ ひとり乃
巣をまなび。燕乃かとぞこひ。蝶の謡をくろそ 根の
梅をたわ。頬向の家をかゆれそをひよ。あらで。癇雞か
蜻に導ひ。鳳凰の威を怖るゝ。むら八。凡鳥乃嘴つくら
しんすとよろ。ぶ。山鶴が逸而乃声と次ぎられても心
らくしき。一日お閑路と指して睡る。嘴半凡今
守擬しむと。とげられてば。又おく蝸蜒乃部とめらめて
抱乃貝の少進絶。業標乃蓋れ戸もつてぬ住みなから
風雅乃友れ入乱也。寛生寄居虫お家をわ寐て

訓乃秋言ふ人ふ合ふしまさやさ棒て、たらんしめとく

閑居賦

汶村

○鹿山乃西の麓に月を志らひ。まき物こ冬て、まれ
行来も絶ゆるもあるふ。しや香味く興を催
うきともいはぬ世の浮海のほとりにわ八中しすごさ
ま先ず雲梅野の行くの。菊紅葉の閑伽棚も棒まつ
植まえおしき袖。宇治山の隠家まは楠柳八風流を盡
きじ人給ふまさ見たり。されバ一りしのさびしきそうやる
おハもし時雨をえふ。ねハ糸齢ナノトとえんなくね
出の庭をとろし。さハ雪見のさゆるよと見て。

さとりの茶粥菜粉乃饗ことよ朧を沙羅し綴て
背負(セン)あさびしきを石をといへたまる。淘ハ三頼乃鐵
とけとけ。あるゝ山家の風をねむり。補一鍋二畳三盃
まさかみ米子奥の柳子を相して。紙乃そろくと守
自刺(ジリ)乃自由をしる。耳の慶(アカ)きをのぞれ。唇一ヒ合(ヘ)と士
声の喧(カシマシ)しよと簾て。簾(スダレ)一枚よ車馬の埃(ホコリ)を避(サケ)たり。
世を捨世に捨られし難ゆりまもなくて朽しらる社。
ましれつふれハさへ名も。今の家居めくされをつくるふ。
今よ八八珠を画し。酒よ八石珠を写し。摺板乃陳
すよハ雪季あり鳥を彩ゝ皮がおほる八樟(クヌキ)よくうつ乃
君に歩を恥む顔よ八花緑青の文字を彫(チリバ)め。軸よハ純

八能乃節を来らも。露をきて手にハ水を湛へ。ゐなかふ
剪はく薬く。琴三味線乃類。小与浄瑠璃の曖昧の
乃臓を覚し。行人此是をしらむ。粉白く黛
なりとも此墨とつくる故。紫のいろく紬を染むることもいひ事を
其外の牡丹芍薬小数今を尽し。麺鉄漬に味を
つかはさを加へ此ハ文政をなして数多はたらし。燈ハ金津を
きてらば月の光を奪ふ。或ハ菜なる枸杞子の種て作るまで
はくのハ又花茄子を催ぐ。ハ石乃店よわきなく新
乃倍春に俵の生業を続る。耕頬の菜摘よハ孫乃
菱角をちぎへ。ら絹ハ茶居も。彼清紫の茶居と名を同
じうきしや。要するは天下の寿なかぬ人。開居して不善
なれとハいはで天下の寿命ながく通しなかるべし

招魂賦

文考

○爰するに吾翁の魂あらば。行てみづくより白さらひ。其まゝ去ぬる速
よ内来ると。おもし神ハ無月十日あまりの。淑気乃同じよ同人
あそびて中々由なし。為ほまり。内さバすどり内りて来ざら
むとせし。ゐを紙かへりよ来神。実門よ去の花ちまとバ
替るさて別をうらひ。蓬窓よ在の月落まバ。余て
供どもなりね。さ紙まハをとをまし君よ此住よ此世中よ行よ郁
乃む其道殊とハようて久世。何ちの竹来なりらひ
春の色乃経よかゝるや在りく家。志らしくハとまとまりしつち

こよなくして遊ぶ人あらし世。還来(ゲンライ)神し。ふまえむし
しちきとかいへど。蘼蕪(ビブ)乃香ふかや衣ふそむらし。
ありてむ薬の花なれてよ。手のまろびなどかうぶらし者
魂すうしゆうれ還来まと。去婆情ハ。ぴ凡ちよあらざまる
きちむよ。かれ蕎麦切(ソバキリ)ハ。山ばの山友のは細さよ係よハ
あら稀いど。せとらしのんよりほまじざれバなきず。豆腐を
取りなれ報ちりき。蒟蒻(コンニャク)ハ思ば乃望れ名よう無へ
ア。いぞ世の人の氏味よあありしん也。琥珀乃霜
とふるハ菓子(クワシ)かがやしく。折(メ)桜(ナシ)乃あを帰しが底ハ酒文
まみぐり也。香おを浴さバうねなしう有や。斃まけ偽かと木
きざりうみなよくありざら世ざさはやけかの宗し

むかし都ゆらむびあ藤(ナミ)とふ緋て。汲まよまもしく長
峯おもかり山桜ちゞさく出の寄ふさる挑よされちる
てさ賀の吉びそ乗く多にまゆまかの幸清の松の孤(ヒトリ)
乃こ。花の朧(オボロ)のちぎりやハよ千結む。枝より結むつる
ひさんのこら侘と入江お弱とむべき人より乗結。むりし
紫田路。秋の秋をまに法ては。痛茗の旅よふる男を
住しかつを程のたつりハきく傍ならぬ。さ深ちおぐなれ
罪やん名のことさもしろん。讀む比の面げも。今宵ハ待人
あるうしぞこの未明。松帆の青羽山とくや。去かの石
そ向そむの花も咲さらん。世よ坐坂まん関ハあれど。雲は
乃原のいつでや偽らん。魂こてふ偽まま結。世こ心を天臺

さ。人乃心あらし。されバ風月の情を弄らん。地獄にさ
おちそらん。まして風雅の心をもとなりしまさ(?)れバ
孫悦からけさ(?)桃(?)にとて。いとおもふにまかせて
たれおのれの益(?)なりしむしふに俳諧がされにはものゝ
ゆうして。梅お花のさまを見るにも。ちなみに論する
人にも。さらに世の人の是非のさたをむとするにそれも
けさぶんもあるらし。去る作(?)不(?)杜国(?)風(?)葉からも昨日(?)
閑(?)何がし。岐山乃蕉(?)桃まてよ自(?)さ乃ん(?)儒(?)け
まじなれど。十と慶(?)あかれ旧(?)狂(?)の書にお(?)らなされ
おぞ(?)始もんゆきあ(?)あけて。おはよハいとまでも(?)
よ。雅(?)しらがらしの(?)俳(?)よりうして。申して(?)

むやみにぬるくなつきて(?)かし(?)し。俳諧よ。作者乃
信あれとて(?)俳くに。さそむとて(?)。誠(?)おほえ(?)
きぶんいつはり信なきと俗を(?)とりて世をつくる(?)
俗を是とりて俗世とする(?)むとせしふ中に(?)いふ
を信あるをとめすぶる俳て。信ある人ハこのまさ(?)と
なしと継(?)て。俗ある人をこれハ川(?)なるとならぬ(?)
そも文炭俵(?)。後信(?)箕(?)お(?)書なら(?)ぞ(?)。今や俳諧(?)
信あらざるも俳(?)のいふといふむよ世よ拾(?)と(?)
をれ猿(?)よりくもあらぞ。そあるにといふをおのく(?)
おあらざりんや。けれお魂するやうにゆるまず(?)俳かつ(?)
去(?)来(?)羽(?)まぜむ。意(?)湖(?)よかへりまさ俳。魂(?)湖(?)よまで(?)来俳。

譜類

百鳥譜

支考

鶯ハ紅紫乃をみ世にてさまぞ人よりうかゞはれびし
陶渕明ハ菊。邈塵の跡常おかといつるをれたる。鶯ハ渕ゆ
が風流あるをもてあそばゞ。さればゞ野辺の蛍乃おもかりに
ひろきめる時。宗門乃月のあらそにまとあれ松なりしむ。
此とをはりとねハえまく挟りよせ。声の代鳶(トビ)の世話ありく。
衣裳もおろそかに借る々。よして風雨よりいとくに出
なかんがれ莊周の夢に。胡蝶とおそべる。是もむつし
とやそおりける。

雉子の聲もいとしく見えて。名に高き物ハ其の物なれど
あはれといふ物にて。一羽にて鳴けば合せ給ふ事しけるハいとゞ
韓信が古事乃。文武をはしめきこえたるべし。
蒼鷹乃人をつかれしく。眼の内におもしろきを
そろへたる心ともいへり。されど一羽にて名ある
世の人の物ともゆるしもせずといふべし。
かの斥鷃(セキアン)が蓬生(ヨモギフ)乃宿ハ。鵬をいかに見るらんば。大鵬(タイホウ)も
天乃万里をうつやすらず。さればその物をあはれむ
のみにして。かたつ沢らをや。むかしもあれど。彼鳳凰と
同じ名ハ心をかしき鳥よりあるなし。
稲負鳥(オホセドリ)呼子鳥(ヨブコドリ)しらぬや。このくもる春の山にかくれしげしの
此物や云ふ説。椋(ムク)と鵠(カラ)との二鳥ハ。それ〴〵ともに鳥の名
成るべし。言へる説鶫(ツグミ)といふ鳥なり。むかしおもきをねしきる生
けしんぬしねば来ての所乃咲にぼるとて。時かのこる事まだ名
付る。鶺鴒の数乃時に。知せるよしでいとしし。されバ此名れ
名る数乃きくびをいへれあるらん。其の物がかくちらし。名も
なきれとかる。目白頬白乃きくびかくるに。鶺鴒(キクイタダキ)も程よわく
あし立刻をいふもの。自然の理ハ其中にもあるなれ
捨しかも。撫動をもいふせよし。
雲雀ハ晴日に聲あげて。それハ空しきも天にあるべし
けとれて小春の日をよくおぼへて。名羽乃雨ばらなしに。
物し鳴出すよりが。お流れて物る鳥もなかれバ。あの物

さびしさこそしられけれ。おもしろ何をおもふ世
「三光ハ。啼声ハ月日星といふなれバむつかしきまで
かなや。仏法僧と啼けるあはれにてこの鳥の山よりいとなつ
かしうこそおもへれ。ことにおもふ事ある。善知識と唱
ふるぞかし。世をのがるゝ者めぐらるゝまゝに也。提壺乃美酒を
かひ。布穀乃稼をすゝめまじいすも。其をとの種がゆへからうず
経じ世の人ぞ知らしむることをしるを。蜀魄の不如帰と
啼ちぎりハ人て揺落の声なりけるの
「鶴の声ハ江あまおもふ稚。此鳥の境乃雲よまきまどふ迄
まうさうに見え待らん。声ぞあり稚よ。おもしろ八出し。
「鸚鵡ハ恩をしれ性なれバ。此国にハ有難からず
かくもまてぞ思ひし秦君が鸚鵡ハ羽が色が身まかりし
跡乃名を呼はこそしふんをいとをしむ。章沢のかきれ。
おなじくあそへども。おのれしく思ひとぞいへる。配所乃
詩なるバさもあるへし。紅楼の鳥も。おもてえいくれて
万里の外をまでゐめぐるとや。扶桑十寛志八ニ有飼鳥於海ノ島秦吉君之故事ニ
見きて。おもひけぬ事なるべし。
「燕もゆかりハ見過るぬる地。楼閣よひかる。つへ。絶にて啼いて
飼よハ。かなしき声をはくさまやれバ。江湖のノ俤の一秋
二度よちぎり捨て。声をも世よつまゝに世をするがごとき経
て居ハ。人まつねへもあかり鶏ぞ待ハ朝廷の名れ。人ハまた
おくら稚をとの雅もおくりかまへん。涙乃こぼれたハべり

かゝる時よりあらんか、かの漁師乃家路にかへりしちとしはきれ
より孤村にやく夕陽を嗁き出れば、猶々家よう今り
青もおゐるんと。此ちきまよ変もおもつれしなるし。
鶫鴣と八名乃がしら紀との色。また其のなるの声しる。
旅子乃竈をおどろかし。黄昏の喰の帝しよく旅人の
涙を催をすゞて帰きおちかれしさにお鶴ハ隠
逸乃風情をふ。

瀟湘夜雨乃おもかげ忘れきれて。篠乃ちよわおそきを
あつまりあく帰八んもきゝまて。かなしきぞ人の
おを疊なるおよ。おお濃もいよ濃く。雲ハ来る訓て
あきふらん。戸をしがゝ田の中にきこゆる声よ寒て

夜乃すさめハ。さまきしも窓に通ひつる?て河風屋
とふひおとすらハ、ちりあれし人もなくて、何のふえきも無。
鵙ハましてちら川浦乃あら縄なる?。馬嚢と以て寒を?
汎よひるゞへまこるが角ゝひそれて、ふるし。織浪乃
夕暮ハ江山の風情をさき、別ちて縫へ?絶にて此雲夢
ときこえし澤ハ、いかなる浪よりあるらむ。
向鴎ち人をさけて。をの絶頭なるをのなれ。忘られ
陣後乃。をの稀峰て。人をさびしかりきむさん。
なべて卯のむ里とハ。いとなりふ。夕陽の?ち
まおるまちゝとおつゝて。山寺ハおもしろけぬ嬌も帰也
事乃さふらにき?桜も?さびし。ぱいとあち

ひとへに雨の日をかなしめれども。雨花の深きこそなからんハ
陰にぬるゝしもいとはざるべし。
霰ある夜ハ、ことにおもしろき也。ぬかるゝ事もいとおかし。かならず
露ハ紛ともいへる哉。しかるにたえず。されどもあるべからず。さるさびしき
老偏にもやがてしも市中にあそびゐる也。
涼しき夜ハ。何なる事ハ。しるしもまさるを中にして世をそむかう
むかしも今もかはる事なし。世の中の静なる時ハ
こともなくあそぶなるべし。
喇叭(ラツパ)の声の飢(ウヘ)をしのびて。本より持をするもある
きて。紛れてけりとなく。ぬるゝをもなほきさる。紙かぎりゆき
こそ、その心ばかりはまことなるべし。誰もし。いかさまにする

おぼゆるべし。雪降れバ空も山乃景色よ。雪色そびやかく。
橘(キツ)乃梢(コズヱ)もちるとも、しまた降りしを。けさ乃夢おどろかし
遠(トホ)うしていさや。張君が家をとぶらふ人もなき紙
あかつき秋夜一夜咲ありして。その初めに咲きなれやると
さしもなき物の月に錦しう。さし出するに降まま
かぎりあれバ。世の中のさびしさも宗なるに。地乃雪のさかえとて
ますくむもあへぬハ。いかなるゆゑより侍らんといひけれども
おもしろき也。蓋(ケダシ)度(タビ)ごとにこれ。ゆゝやらに寒あるも深き
ことなかりしを。後ハ何ハそれしき。
雪の落乃晴をよろこびて。何やしれのかずに勝る也
也。帝に人の上、苦しく侍らん。鶴ハ基作乃風情まで

人乃法を守ひあつかふこそかなれ。虚誕もおかしく常ま
あつもしてそのかたがたをおしまるもおもしろきやすきに流泝を
けがれとものしのびして。是を世の外にかくあるもので
ぬとおもはるさがかり惟志らんとするおほくて世の人あらじもの
しかれど是をかりうる翅も心得たる事をおもふべし
あつかむ。謀りあれかむべし。

世よ人を葬る者ありて。昔を記して父母の墓
あるにてもなを次へよまざあ得て守て酒乃ませ。價をも
やうをけれど土へ入れば精しとよしとれて。冷なきさるなん也。
罪にし虫なくしてすまさんとその徳なる次とし。
網しても心得べしざるこそあれなしがば。いまだしかしさなるも
ありがたしよ。人乃子よふかりかれて近うところ無きとも。仰ぎ
よ仇きく徳を知べしとさ知し。秘の薬ぎ
こさきや。おそれもおそるべきもまさるべくて。よきなくてもる一しき
もおもく待たんば。鳶は羽の下よなるをくそれさ
挙も紙人もそろ徳むとおもふて世知て名の為もるも
なさぞるぬべし。さらばふる何のこそれをと思ひなと
なきがおもせきさるん乃いとなもなかりん。

賤ハさらなるかつ徳なくて。鳥ある窮こそれなりが子なる
抱せうらバれらふりおりん。

賭るの民情ハいれしなるめりし。何がしの中納言にか何かに
人を思ひそめて。うるもそ自ら思ふ家もちるはる徳で。妻

乃んもさぶらひたまふ程ど。色よハかにしとよう志の上
かハりたれ。さまで田舎よう来たる程かく。田舎ふしよ上
はらぱかさしくさゝるとの。音よくさとおぼつかなれ。
孔雀(クジャク)　孔雀乃尾ハ。一家の花よ勝るよ。驪(リ)山乃花(ナギリ)をぞ。百千
乃雲をと隔り。錦乃屏よ。錦帳を垂きハ。ゆきまへ人が
疑も愚くらべハかゝるまなし。ざゝふハ翡翠(ヒスイ)と以よ
をかハぱかなれ。春乃人乃意よりあらむ。杜子美が衣裳(イシャウ)よ
嘆すといつるも。ばゝるなくてかいあらじ。名よ於で見を
我家となさバ。ま然人よやあやしまれむ。名を少
よりば、も婆乃おもひ出て。鸚鵡乃中ハ更世瑠璃(ルリ)と立
名をも世の人のきくとも。さ流るれ。

鶯　鶯乃声ハ。滑よして。梅よ住むも花やしき程ハ。是も
春ゆゑ乃さとびよハあれど。情やおかしやらなき
よりて。秋なる色をいとうしなしも。といふぞかし。
鶉(ウヅラ)　鶉乃世をさゝそふる中よも。鶯えりわ萌(モエ)乃いの中
きことのゝおもしろし。夕べよハ麻まじひ。鶉よハてやゝ起て
荻義乃ま乃実をどにつまさて。ゑおもひ捨まやハお
たる時よが息などもつかぬやうよ嘆てぱとなく
さまぶふハ侍るたりぞ。縦をも非乃つひのとなるべ
かし。我よしむひもせまし。
鵜　鵜そちかひ骨のきいつくばまるをぬる。死水乃魚
を啜(スヽ)り。どいゝさもれハ。魚を探て侍る。及穀

そゑ先ゟゐる乃ぱすとゝめしてかきやゝなゝらねバ猿ゝ佛
きらる變なるべし。鸚鵡乃さえのかゝるよかわすらるゝバ其の詩を
なをもあふるゝべよゐるそそりやゝいしとむをはし。
鳥めしてゐる指名にあらざれと、のちゝ。鶺鴒乃一名を鷸
鷸かくとやひ。倭鳥(ロニツ)も行きまといふるゐるかつきて登ゝがか
ふごらむきまり、空しるに傳きど。帰併ちや涼しゝ。かの鶴を
とゝ子ゐるバ、しらぬ云りそえゆ絶りしむやへきくあなと
なきこバ、米穂乃虛をやしそゝら絶むりし。
世を係るといふゐる家ありて。長秋乃さゝゐをさよしば鵜ふ
不文者なし。去ゟ絶ども。巣はそゝふゐる斜ゝゆゑてはいもれま。
世をゝハかなしかれ鶏ども去りしバ、老きゐし二郁あ又へ
あつもなゝゝゝる公冶長が出まなゝれバ、去るゐるをみなし。二説一雉
雉ヲ好鳥也其餌ハ蕎麥白まノ類。饅頭ハ嫌ナリ。儺にまさるゝそれなりしけりバ。世ヲ
あゝりて是も又論なし。去旅にさしぐゝる隆鳧(リウヒ)ちを
出ろに人乃思をそらし。愛宕高雄ノ山ニ在テ。杉ノ木ニ棲ル鳥ナリ。迦陵頻(カリヤウビン)をも
其の奏にむかし聽きそれバ、無ハ去るゝまで。かの蝙蝠をいふ
をあてしこそみかはむる。

百花譜

許六

當世乃人の花をど古人の實すまきそまれなりつまと乃世ら花
實兼備乃世あらむ。
桜乃風骨をいふ乎。唯陸奥乃中よ似たる物ハあらんか。

十一月一陽の気に、蟄ぞくる江南芝玉蛇の外え出
よりわけ浮世をしらずくらし、風流の道をみがき候ふ事
を尤ま事とくていいたし、若輩なる者など以てのべ遊芸乃いん
かつまかれを知り、いきほふ心にわ、桐丈乃ある事がくし
痩さかんに浮と紛くぎの其乃身は飽きるものに一トたび
着る衣類調度など、ふさはしき間もなく、かならず人々
打捨合あれ、男あまたには急激なる事すべからず結
出さんとし端紙をかへしてけつしかさる思の一言に心
の寄る緑かへくには、借銭の利に利をかさね、やりくし
算用も立ちかけ、生涯の家をも逆さく、哀なる住居に
親兄乃調をそむきしも、打捨て流浪乃細きいとなみ。

手まへ、すゝて暮しの朝晩もせんし、往来もなくて世を
静かにてしのみ、因果なれとていひとぞまよふ人々も似たり。
「紅梅と以て出一トたび被召染乃心を飾り、未開紅の色を
くれなゐまじりもやうて蒼々まで、色もいつまでもしく
我が好へ風流と学ぶも、ゆくまゝにばかりなる色を失ふ
身となりて、三味線乃大躍にはつかなるもんなくも
風流をはなれたる心もぞすべし。
「操は金盛乃傾城なり。天晴風流をすてたる風流
好未だ色の多くにしの一点も菊花なれ。
「俗業は間じく、野郎乃たてと作り秋
なもさうじに、世中独しのきどども、貧者ふましくて

うるはしかし。猶よ香おほく一色の。よく人心を悦ばしむる

花。

梨花は。素紫乃傳に侍る。妾のごとし。緑川も亦ふ

ようちさびしきさまは。人乃下にそへて侍るごとし。

棣花は。世ちてあれの人へ乃。よそ賞むくへまさる。縁ゆかる風

俗なりとも。似合たれば。あはれがる事家を治め。身を脩むるを

まもりしはすめども。されど其ことなりへ。うしなる化粧す

るにちかく。顔のよそほひ花なり。

桃ハ。元来婦の女なり。嫣然に。よつて桜梅乃梅や風流なる

気色もつよし。ひとへに下司(ゲス)乃子なり。俄に化粧し

一様を出飾(カザリ)てやくるごとし。媚態しつみたてはる

すまもう着羅小耳乃あらそふ。産毛(ウブゲ)みつつ其子あり。もてはやされ

藤は。桃花乃婦人に似たりとやなるべしとかくいふ下生の

いとおぼつかなし。

山吹乃さまは。すこし伶たる。眉目(ミメ)容すぐれ。鼻筋おしろいがらて。蝶巴に

も奇麗(キレイ)にしてつまやかならず。透(スキ)額たたいつてもちから

て爺をとりておもふべしは。それそぐひらる女乃媚(ホイ)とは

なん。

牡丹の。薔薇(シヤウビ)のそぐひは。ゐ宮らみて見え。猿ひたるにも似よ

被ども。元来いやしきなも乃。形よりさきを久し。見てうつろ

ふへバ色婦とはいへる過去の。日おくれ。妓猫家。世上に誹謗

し。梅やりおばへてよかりし。色気を奇する。おけまちれ

はなや振袖と見るべし。娘も若く振袖なれば振

牡丹は。一類も時を得たる春の花の下に立つ心なる。

おかしけれ。音は嫉妬(シット)の心が柔(カシウ)に似てゆかしく。青ざめたる

吐息(トイキ)をつきなが物思ひに似たり

芍薬といふ物は。たゞ媚(コビ)ある娘のよそひも二八にあまり

たるが。禄にも見ゆる花なり。

罌粟(ケシ)は。眉目容すぐれ。艶なるく。色は西施が様を思ふ

て。様子よく睫にも世などのすゑは。寂しからむにうけたる

男の一念のみにて。あさましく散るばかりで花よりも

より時のふたつとまぎれぬ。

仕着は。みぢかきさま女なり。盗み心して。色をさるには

ずり似ぬべし。

朝顔は。ふぼなき身なる女の。目をさに病む心地ぞする

百合花は数本あはし。笹ゆかし。博多ゆるし。鬼百合の色は黒気

とちえは一種にして。生得花も死なるしたより出来

は移ろふ位なる姿。ぼくえ見はよくかるさをあげどかすり

腰をさく女をもやさしき女に似たり。

姫百合は。十二三になるなる娘の。様に言ふ心ぞし

なべくうつとし。

合歓(ネム)の花は。様よき恋なるは。深窓の中に綾錦をかくえ見

女に似たり。これる事の。いかなる事かありて。かくれ遂に

見ることなき。おばけなし。

一 ますたに三毛猫乃目をみしよりハ時よりちかひて晝
をさらぬ女のぞうしめて夜ハひくへよむをするは滅いつき
かれあわさまならん。
一 紫陽花(アヂサイ)のむらさき色に眺ふるをそむるがちくらもて染
白痴(シライ)癡乃あしおもすきるもなくて真さ先てやさぬ
一 蓮ハいくしさ不なくなしだへバよそ乃縁よかまき
天への数をひとしぜこ中ら佛やきてんよりおかる紙
一 祈乃むハ身一名目らし時鳥乃来べきにハかなしき嘆き
おぼしきろくありし名残。らつぼの花と以ふ人さへ武変
なかが卯の花月夜の名をでみよ。嬉しめなる哀歎了し。
思きさ身仕なしきる女み。ふとおつ絶しるがゆ遠く轄も
なくさこ紙て数の陰ても移つらなくみをきいそ扇
新ならぬとぞん道や師も述とる件のへなかよふらんと
いとなりし。
一 胡蝶の盛もく多紀どよき女乃手ニハ扇ゆちよ許多ゆゑ。
古風ハ雪れいかるし。隙なきぶ手ふし。一月乃日数と。
木目をかしうきも。川込むるぶ手を扇し衣装きるしお
日さし出る隙よ。紀も挙げよ許様に衣装などあらく大
くぼのめれ出さろ候ゑ。
一 鶺鴒さむ和乃る紀花たわやかぬ女乃。一筆し身せを
まそ腐がし
一 つみの色ハ様の羽よ薫物すとしやん師乃備わ襖し

侍るこうゟを使人乃面親もうらくしく見れバ見れよ笑えを
あさ様でロを閉ていう也
「風俗都といふ也バ見るけべしく。家粧(へ)鉄精(かね)を粧
ひ人の眼を迷ろ也。安う女性ども多小鶏くてゐるべき
こ比れもあらむど。あ少わ楽つき乃いやよろずハ彼とか
乃李(スモヽ)陰口りとよハ沁るね。
「女郎花をバ見しへる中女ゆゑに。我庭遊むとぞ師し彼
飛よよめ侍ハ。女郎乃二字よなぞハれ侍ろしんと。秋野の尾
花よ侍めるを侍ると蘭よさ花を、かきしく花さらむハ手称
やさしく見ゆらんとぞ。女人侍物すきてうやさし。花ぞ女郎
花といへる也。もりまして八ちて清れがくうし。自分にバあらさるよ
かきさと挟みく。小町をも見の器とい。さうして見るを唯
花といふ也。大卒(オホムネ)ハ女色よして。かざり物を花バ。大家をうる
くべき。枕んの乃さばおもなしさ花バよそ。男ならぬさハ
まわらる類ゝも其あるで。男女の中よさる所見信せ。ぞ花
本むよ類すろ物なし。古人蘇葉(アハ)乃むかしといへるそ
実寅乃ちくびよ比すべきか。藝(タキ)も花と鼻(ヒト)しく黄
うして下葉すくれよ縁か花ちる。彼岸花のそく
ひよやりんひ。
「桔梗ハ色よ国をそへ花てめでるの中よおもひは
ゐ咲おとは。四家化音の戸よ。よ蛇娘見らるん。蛇ぞ在居
「萩ハやさしきなしせぎして手よさわて乱すべき花

すくなけれども萩といへる名目ありて人乃心を和らげ侍るなれ
さらバ地下乃女のよく〳〵ひとへにはこゝろへするなりけり
さるハ似合なり
一 菊乃名を送るハ。和漢ともに名高き草なり。されど
だに。あるハ夫てるといへども。風流ありける間ぞもちゆる事
を嫌へるハ。よろしき女乃あはれと思はれて困なる事
そつ後よまきのびよりひも。いまだこけりよなるやうに
乃盛を経バさながら盛をとおりをへくもあらず
一人ある女さへすれよひら経てんなかく世中よ
位能く人のためとも思ひ侍る人まれ也けり
一 菊乃名をつて。高きとぞいへる中よ
と積学を画しけるハ天地造化乃妙にかなへる事
なりと感ぜらるゝぞかしされバ越路の果にてもしらぬ舎は
富貴なる花などいへる所しよおもひの外に風流を
わするゝ花そすれ
一 牡丹乃花やまるといへるたとへバ大津伏見などに分内
技た所にて遊女所。工商乃家にも彩をなしへ行交ア
まじ経バ目にのむさやどにも須臾の風俗を見習ひ
素文(ヤウイツ)へ生まれ(イキミダテ)の黒かへまよ花やまを画し一向(ヒタスラ)
遊女乃立振舞よ似る経バ。両親(フタヲヤ)にもよそにも見て
制しつらひ。せよと所をとゞめざるハ大きなる歎きなり
事し。

當世乃人ハ花に色をそへ人の實をもて俳諧をいひこしらへ乃
ゝ花を實に茶に備乃世をあらそふ武同三昧人情の花を
うつりてかはらんを驚しやまれハおもしろきを以て第
一とせざるぞかくしめて人は耳目を驚し侍る。今見せ
致く事乃俳諧の實ハいかなることをいふものならんやかれ
かたしてやくそを悔しまんかハ大道に帰入させよ
麦を文實にうるちをいれむ。茘子の觀乃ふかくしも
さるる無實性の人乃鯰われふかくしく若果さ壁
乃命よむしとおもひてたゞやるべし以をまちうるべし。此
此乃丸顏ハさんちや風乃伏あり。瓢乃ちよさ乃
熟柿の甘さ下戸にハふかくしてかはらず
とゞまるも只やうへ乃實の本意を得べし座右乃本意
まことに俳諧乃實ハ其意を得べし

山水ノ譜　許六

○それ山水を畫くに法あり。一丈の山にハ一尺の樹一寸
乃馬一分乃人なるべし。遠人ハ目鼻をゑ
がゝず遠樹ハ枝なし。遠水波なくして雲とひとし
かゝるべし。岩に三面をつくりて。道にハ二乃岐あるべし
まへ西を走道を知を第一とす。遠山ちりにそて
せうらず。遠水ちりまれとまじハらず。林木遠きことれハ
隣卒にして近きハ密なるべし。茅家あることハ

やつくりにハ筆ぬるきをとのハ硬(カタ)さよ生ずる所ハなだらかに石を
出でたる所ハ曲(マガ)り有り石ハ節多くして岩(イハホ)ハ就をあら
し山峙乃変化を表ハし。山乃清流を表ハすべし
楼深き所にハ寺観楼閣の屋社を有り。水郷ハ居所の
間にハ酒旗(キ)乃青白を顕(アラハ)すべし。又神王摩詰(マツ)が水
氷乃賦の法式なるべし。やゝともすれバ山水とて、かりにも平らかなる
さ神ども城ある所にハ天守を聳(ソビ)へ神社ある所にハ
鳥居を出すべし。山石水木ともにやゝもすれバ様ハ和
と和漢の絵によりて、その和漢各別乃画法あるべ
し。富士(フジ)ハ下野(スツケ)なく京大和より出すべし。桜ハ吉野
とし。京の景色もおなじ。泉(セン)ハ京を跡として其ハ
九世戸(ト)ハ景繁多にして難(カタ)かるべし。須磨明石(アカシ)ハ須
磨ハさびしく明石ハ花やかにさびし。住吉(スミヨシ)ハ松多く
て面白く。泊瀬(ハツセ)ハさびしかるべし。六玉川(ムタマ)近江
八景ハ湖水乃上を見て知るべし。唐の瀟湘の和の近江をもて
いへるが如くも西湖の西湖にも倍まさると和画名
勝を写して帆ある舟をかならず唐の西湖ハ水深く
して人乃游(ウラ)らし湖にあるをまねらず。遊人乃舟のこと也
其世にも浩汗浩舟乃繪とて切絵恵舎をしるべし
丹青鮮(アザヤ)かに彩色(イロドリ)菌白細微に文(アヤ)をなれ奴(ヤツコ)乃類
に墨を点じ。傾城の曆に丹を含むこと続く近
きをしるべきもの也。假令(タトヘ)丹青ハ淡(ウス)くとも浩中乃景

白岩源五郎主

也ハまつりごと名乃都よりして、古人の格式なるべし

すべて画圖をよくまなびこれハ其風雅をしるべし

古人画中に詩、詩中の画といふる。下なるや世よ

稀に於る者、画意を知りて後をしらば

畫工ハ詩をしらず、詩を知て画ハ知ずされハ画

也画の志るを知りて画を知ると志るハ何乃ハ知りらま

ずあらんや

國學院大學圖書館